

館長室だより ②

100年のあゆみ

図書館長 江澤 聖子

本学附属図書館に所蔵されているセノオ楽譜の存在を知ったのは、2019年の図書館ライブラリーホール、また旧東京音楽学校奏楽堂での演奏会〈セノオ楽譜を音にする〉の開催がきっかけであった。西洋音楽受容期の明治・大正時代に一世を風靡したセノオ楽譜。大正4年（1915年）セノオ楽譜出版社を設立した妹尾幸陽（1891-1961）によって様々な作品が出版された。海外からの演奏家による生演奏、国産ヴァイオリンの製作と普及、国際的な日本人歌手の活躍などによって市民の西洋音楽への関心が高まり、出版された作品はオペラ・アリア、当時大人気を博した浅草オペラ、ヴァイオリン作品、軍歌や民謡の編曲、芸術歌曲など多岐に渡る。また妹尾は、中山晋平、山田耕柞、美しい表紙絵を描いた竹久夢二らとの交流の中で、芸術的洋楽の発展に広く貢献した。先に述べた演奏会では多くの作品から十数曲を選曲したが、本学図書館で楽譜の展示と共に実際に音にする喜びを共演者と分かち合い、またかつて山田耕柞も演奏した上野のホールで、集まった聴衆と共に古き良き時代に生きた人達への思いを馳せることができたのは、貴重な経験であった。

大正15年（1926年）に出版された『城ヶ島の雨』（北原白秋詩、山田耕柞作曲）の楽譜をあらためて手に取ってみると、演奏会での新鮮な感動が再び胸に蘇ってきた。セノオ楽譜には譜面の他に、妹尾や作曲家自身による作品解説やコメントも記されている。『城ヶ島の雨』の”1924年、関西での管弦楽演奏旅行の後のまるで暴風の過ぎ去ったあとの空洞のような寂しさからこの曲は生まれ出たのである。大阪堂ビル七階の窓からは、うす霧のようにたちけぶる五月雨に濡れて眠る淀川の流れがたえがたく美しく見えた。”（一部要約）という耕柞自身の心情と、白秋の詩「雨はふるふる、城ヶ島の磯に、利休鼠の雨がふる。雨は眞珠か、夜明の霧か、それともわたしの忍び泣き。」（抜粋）、そしてこれらの情感が象徴的に描かれた表紙絵との一体感というのは見事なものである。音符だけでも作曲者の想いは感じ取れるものだが、選び抜かれた言葉で語られることで、聴き手は日本人の持つ繊細な情緒を自ら意識し、そして日本人であることを誇りに思うであろう。

日本歌曲の真髄を、優れた感性と卓越した技術で体現する若い歌手が、ますます増えていくことを願っている。

『城ヶ島の雨』 請求番号●F19-948

資料の部屋 ①⑥

平和について考える

撰 正弘

終わりの見えないロシアからウクライナへの軍事侵攻が続いていますが、今回ご紹介するのはウクライナから日本に移り住んでおよそ20年になるバンドウーラ奏者・カテリーナへのインタビューをもとに書かれた図書です。

カテリーナは1986年、チェルノブイリ原子力発電所から2.5kmほど離れた場所で生まれ、生後1か月のときに原発事故が発生しました。カテリーナと家族は、国が用意した避難者向け住宅に移り住むことになりました。カテリーナは6歳になるころに学校に通い始めましたが、原発事故から避難してきた人々はそれを理由に心ない言葉を投げかけられ、なかなか友達をつくれませんでした。

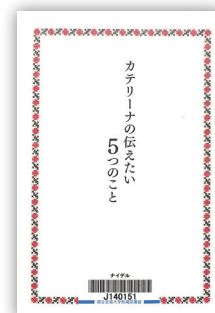
そんなある日、原発事故で避難してきた子どもたちだけで、合奏团をつくるという話がありました。カテリーナは合奏団に応募し、入団することになりました。そこでカテリーナは歌をうたったり、民族衣装を着て踊ったり、生き生きと活動するようになりました。

カテリーナと日本との出会いは、事故から10年後、日本での初公演が決まったときでした。不思議なもので、カテリーナは空港

に降り立った瞬間から、日本のことが好きになってしまったそうです。その後、カテリーナが19歳のときに、バンドウーラ奏者として、音楽家として日本で活動していくという決意を胸に単身で来日しました。言葉の壁や慣れない土地での暮らしなど様々な障壁がありましたが、カテリーナは諦めることなく夢に向かって歩んでいきました。

本書では、生い立ちについて、音楽について、戦争のこと、ウクライナのこと、夢について、というカテリーナの伝えたいことが綴られています。これらは日本で生きる私たちにとって無関係ではなく、項目ごとに考えさせられることがあります。ぜひ、実際に手に取って読んでみていただければと思います。

一日も早く事態が収束することを願っています。



『カテリーナの伝えたい5つのこと』 カテリーナ著 ナイデル 2023
請求番号●J140-151

えらぶ まさひろ ● 応援している故郷のサッカーチームの試合を、数年ぶりにゴール裏から観戦しました。平和があってこそできることだと感謝しています。